

研究会報告



第5回東京医科大学脈管研究会

日 時：平成10年3月10日（火）

場 所：東京医科大学病院

当番教室：老年病学教室

主 催：東京医科大学脈管研究会

1. 壊疽病変を伴った溶連菌感染の関与が考えられた皮膚型多発動脈炎の一例

(小児科学) 小林楠和, 茂田幸子, 永見博子, 小石洋和, 白木保代, 篠本雅人, 河島尚志, 武隈孝治, 星加明德
5歳男児。急性上気道感染後に四肢に掻痒を伴う紫斑と有痛性の皮下結節が多発した。臨床症状、皮膚生検等にて皮膚型多発動脈炎と診断した。経過中に左第2趾の壊疽認め、サーモグラフィーより循環障害疑われ、抗血小板剤、抗凝固剤、末梢血管拡張剤等を投与した。

その後足の壊疽病変は後遺症なく軽快した。また患児においてはASO、ADN-Bの上昇認め、溶連菌感染の関与が強く疑われたため、ペニシリン系抗生剤投与施行した。小児における多発動脈炎について文献学的考察を加え報告する。

2. 膠原病患者における5HT₂ blocker長期投与後の血漿セロトニン濃度と加速度脈波の変動

(皮膚科) 五十嵐 勝, 奥田知規, 大井綱郎, 古賀道之

当科を受診した膠原病および膠原病類縁疾患患者のうち5HT₂ blockerを投与し、長期観察し得た11症例について検討した。方法は5HT₂ blocker内服前後における血漿セロトニン（以下5HT）濃度および加速度脈波d/a値の変動を検討した。観察期間は季節変動を考慮し、1年間から2年間とした。結果は内服前後で5HT濃度とd/a値は改善傾向がみられたが、両者間での明らかな相関はみられなかった。

3. マウス肺の免疫応答時における接着分子の発現とVIPリセプターとの関係

(解剖学第一) 市川早苗

ヒツジの赤血球を抗原としマウスの気管内に投与して起こる肺の炎症反応では、免疫細胞が血管周囲に移動する。この免疫細胞の移動の機構を明らかにする為、VIPリセプターと接着分子との関係を免疫組織化学的に検索した。抗原刺激後24時間でVIPの濃度が増加し、抗原刺激後2日で特に血管周囲のマクロファージはVIPリセプターやalphaVを発現し、一方血管の内皮細胞はフィブロネクチン、ICAM-1、VCAM-1が抗原刺激前に比べ、強く発現していた。また血管周囲にはLFA-1, VLA-4陽性のリンパ球も観察された。抗原刺激後6日でこのマクロファージは血管周囲の炎症巣から離れ、alphaVの発現も抑制されていた。この肺のモデルではマクロファージが炎症細胞の移動にとって重要な働きをしていることが示唆された。